

實際保育に當つて一年

定 方 と く

「先生お早うございます」。『先生先生お早う。臆を輝かせて元氣一杯に挨拶する子供達に取囲まれて思わずほころぶ顔、「今日も一日面白くね」と語りかける目と目がうなずき合い乍ら、すと一人一人の心と私の心とが見えぬ絆に依つて結び付く。

子供との接觸が無理無く出来る様になつたこの頃、昨年の私と現在のそれとを較べてみて、僅か一年の才月と言うものが何と多くの

ものを変えて来て居るかに今更ながら驚くのである。学窓を離れて新しい職場に就く事に決定してからも、自分が教える立場になるのだと言う事が何となく実感の伴わない氣持のまゝに、桜の咲きこぼれる園庭に立つて幼児を迎えたその時から、良い保育をと心に願ひつゝも思う様にならず、唯、無我夢中の毎日であつた。運動会、ゆうぎ発表会等の対外的な行事も滞り無く過ぎて、漸く子供を取扱う上での多少のゆとりが出来て来たと思われる頃には、木枯しの吹き荒ぶ冬も去つて再び廻つて来た長閑な日射しと共に、私にとつては忘れられぬ思い出を残した三十五人の教え子とのお別れの日が迫つて来て居たのである。

窓越しに見る校庭で跳びまわる一年生の姿を時折り目にして、彼等の何と背の伸びた事手足のしつかりと肉付き初め、一挙手一投足の

の大人びて来た事、上級生の間にあつては、未だく乳臭い面影ばかりで頼り無いとはいへ、自分の欲する事も十分に言い得なかつた子供達を、時の流れは刻々と生長させて行つていくのだ。昨一年の間に幼稚園で得た教員の経験が今後の生き方の上に如何なる影響を及ぼして行くであろうか。努力の上では出来る限りの事をしたつもりでも、初めて實際保育の場に當つた教師からの決して充分とは言えない保育をどの様に受取つたか。子供はそんな事にさして關係なく思うがまゝに生きて行つたかも知れない。併し、伸ばすべき芽、伸びるべき芽をも未経験からの不注意に依つて、萎えさせはしなかつたろうか等と無邪氣な顔を見ながら、幼児教育者の適格性を自らの上に反省するのである。

初めての経験

新しい環境に入ると言う事は、誰でも何らかの精神的緊張を伴うものに違ひはないが、適慮の仕方には、個人によつて種々の型がある。比較的楽に子供の世界に自分を溶け込ませ

せ得、子供も短時日の中について来る人、そうした人は保育者としての良き資質を自然に備えていると言えようが、一方愛する意図を強く持ち乍らも子供の心を把握する迄に多くの時間と努力を重ねねばならぬ者もある。弟妹を持たず、これ迄に親しく幼い子供を世話した事の無かつた私は、如何にして幼児の欲求に沿つた取扱いをすべきか、子供を前にして全く戸惑う事も幾度かあつた。

前日の疲れが抜け切らずに何となく物憂い日、又心のわだかまりが解けぬまゝに保育室に入つた時等、その日一日は落付かない子供を相手にまとまりの無い苦しい保育をしなければならなかつた。

子供の心と一つにならうと心掛けても、最初の中は、今迄とあまりに異なる世界ではあり幼児にふさわしい抑揚と言葉遣いがわからぬ為にともすれば寡黙になり勝ちな教師……當時自分自身で持て余す程の自意識の過剰が、子供と共に喜び悲しむ事を難しくさせている原因の一つにもなつて居た。幼児の行動を客観的に観察する癖が知らぬ中に身について居

た私に、何で子供達との間に眞の心の流通が生じようか。

僅かな心理の動きにも敏感に反応する幼児を取扱う場合、第一に園の門をくぐる以前に精神的、身体的な最上のコンディションにある事が必要とされた。保育経験の多い先生方の間に入って初めから年長組を受持つた事は勉強する上では非常に良い事であつたが、卒業式のその当日迄次々と来る新しい経験の連続に、自分のしている事が正しいか否かの見透しもつかず真剣なそして何となく不安定な明け暮れであつた事も今にして思えばなつかしい思い出となつた。在学中得た理論その他はそのまゝすぐに役立つとは言えず、未熟な指導技術、ピアノ等を日常保育の中で一日も早く習得せねばならなかつた。

そんな私も、種々な面での試行錯誤を繰返す中に保育者としての経験が次第に身について、無理なく子供と遊び教えられる様になつたがこうして以前の私から新しい私に変えて行つてくれたものは、幾多の先生からのお教えに依るがそれにも増して子供達が不断に育

ての心を私に教えてくれた故と信じている。無心に遊ぶ可愛い姿の中に人間が持つ純粋なものを目にし耳にした時の言い知れない喜び、大人になつた私達の伺い知る事の出来ない素朴な驚きの中で生活し、ぐんぐん伸びて行く彼等、先生の目々光つているよ」と臆に写る自分の姿を不思議そうにのぞき込むつぶらな目を眺めて、教えると言う事は、取りも直さず子供の中から貴重なものを選んで行く事であると、深く尊いこの道を選んだ自分を幸福にも思うのである。

思い出すまゝに

秋晴れの空に白い雲が二つ三つ行く。急カーブと共にわあーとあがる歓声、電車が利根の鉄橋にかゝつたのだ。榛名山の中腹、伊香保に程近い折原りんご園へ旅行の一日。案内子、バスとの競争、刻々に変わる山の姿、カサカサと音をたてゝ窓をかすめるすゞき、全てが子供にとつて面白くそして珍しい経験で無いものは無い、危いからと注意するのも聞えないかの様に窓枠にしがみついている真剣な

顔……誰からか遠足の歌が口をついて出る
と忽ち皆がそれに和して、歌う電車は一路目
的地へと進む。こんな嬉しさを私も味つて来
たのだらうかと幼い頃をふと思い出す。枝も
たわわに見事な赤黄のりんごの木、「先生こ
のりんご光つてないね」と言う子、八百屋
でのりんごしか知らない彼等は、消毒剤で粉
をふいた様な淡い色調のりんごが葉の陰に見
え隠れする様が実に不思議らしい。一つはお
母さんのおみやげに、一つを草の上に坐して
順に皮をむいて行く。「おいしい?」「う
ん」次に待つ子がぐるぐると動くナイフの光
を静かに見つめている。小高い丘は秋の色も
漸濃く名も知らぬ鳥の声ものどかである。自
然の美しさと、幼児の笑顔に囲まれて楽しさ
に溢れた一日であった。「先生こんなもの
が」静かに箸を動かして居る子供の頃から頓
狂な声が挙がる。ひらいた掌の上に、餡色に
すぎ透つたものが二本、「ビニールだねこ

に笑う事もならず、説明するにも夢をこわす
様な可哀さに暫言葉につまつた事であった。
// 親とも思う先生や……卒業式の歌が静か
に流れる。「これから皆心の灯を大切にしてい
行くのね」卒業証書を手渡しながら「もつと
背が高くなる様に」「早く嫌いなお肉も食べ
られる様になりましょう」「学校に入つてか
らあまり騒いで先生に叱られない様に」等と
一人一人声をかけながらこのたとえようもな
く可愛い子供達を手離し度くないと心から思
う。成長する姿をあとあと迄見守つて行き度
い気持は、親の心理とでも言うものだろう
か。入学の喜びにいそぐとお免状を手にし
て帰つて行く姿を見送つて無事に卒業させ得
た喜びと共に、急に心の中にポツカリと穴が
あいた様な例えようもない淋しさをどうする
事も出来ないで立戻して居た。

むすび

パーソナリティ形成に大きな関心を持ち、
あるがままの子供の姿を掴み度いと思つた事
が私を幼児教育の現場に飛び込ませた大きな
原因であるが表立って教える事は容易であつ
ても陰から子供の欲求に沿うた理想の保育が
出来る様になるには、尙多くの時間と努力が
必要とされよう。教える立場に二度と再び同
じ時間は無い事を心に留めて一日、一時を細
心の注意を以つて、子供に当り度いと思う。
(群大学芸学部附属幼稚園)

会 告

この度「日本保育学会正会員名簿」を作
成頒布することになりましたので、保
育学の研究をされている方々を出来るだけ
網羅したいと思ひますから、正会員の資
格のある方で未入会の方(あるいは従来
準会員の方)は至急本会事務局正会員と
なることをお申込下さい。

昭和二十九年十二月

日 本 保 育 学 会

東京都港区麻布盛岡町
愛 育 研 究 所 内